

令和4年度農作物有害動植物発生予察情報 発生予報第2号（5月）

令和4年4月27日
山形県病害虫防除所

[概要]

普通作物：水稻の育苗期間は、気温が高く、日照時間は平年並と予報されています。
適正な温度管理、水管理に努めてください。

園芸作物：果樹の生育は平年並からやや早く推移しているため、生育に合わせた適期防除を実施してください。また、散布予定日に降雨が予想される場合には、予定を早めて降雨前の散布を行い、散布間隔が10日以上あかないようにしてください。

令和4年度発生予報第3号の発表は6月1日の予定です。

予報内容一覧

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
いね	苗立枯病	—	平年並
だίζ	ネキリムシ類（タマナヤガ・カブラヤガ）	—	平年並
りんご	黒星病	—	やや少ない
もも	せん孔細菌病	やや早い	やや少ない
日本なし	黒星病	—	平年並
おうとう	灰星病	—	平年並
果樹共通害虫	ナミハダニ（り・も・な・お）	—	やや少ない

（ ）内 り：りんご、も：もも、な：なし（西洋なし・日本なし）、お：おうとう

下記の病虫害は、防除上注意すべき事項等について記載しています。

作物名	病虫害名
いね	もみ枯細菌病・苗立枯細菌病、葉いもち、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、斑点米カメムシ類
むぎ	赤かび病
だίζ	紫斑病
りんご	斑点落葉病、褐斑病、腐らん病、キンモンホソガ
もも	灰星病、モモハモグリガ
西洋なし	胴枯病
日本なし	胴枯病
果樹共通害虫	ナシヒメシンクイ（り・も・な）、果樹カメムシ類（り・も・な・お）、ハマキムシ類（り・な・お）、ウメシロカイガラムシ（も・お）
すいか	つる枯病、炭そ病

（ ）内 り：りんご、も：もも、な：なし（西洋なし・日本なし）、お：おうとう

山形県病害虫防除所 本所	TEL 023-644-4241	FAX 023-644-4746
庄内支所	TEL 0235-78-3115	FAX 0235-64-2382
山形県病害虫防除所トップページ	https://agr.in.jp/theme/byogai-chubu-josho/index.html	
農作物有害動植物発生予察情報	https://agr.in.jp/theme/safe_products/yosatsu/index.html	

1. 農薬は、農林水産省登録番号のある登録農薬を必要量だけ計画的に購入する。
2. 耐性菌・抵抗性害虫の出現を防止するため、薬剤の選択及び使用回数に留意する。
3. **農薬の使用に当たっては、登録内容（農薬使用基準）を遵守するとともに、隣接地や周辺作物へ飛散しないよう十分留意する。また、事前に地域住民や周辺生産者等との連携を密にして事故防止に努める。**
4. 農薬の使用に当たっては、農薬使用者と養蜂家がお互いに連携をとりながら、農薬の使用によるみつばちへの危害を防止する。なお、**交配用みつばち等を導入する園地では、巣箱設置期間中は原則として殺虫剤を散布しない。**
5. 水田では、農薬が河川中に流出し水産動植物や農作物等に危被害を及ぼさないよう、農薬散布後7日間は止水し、落水やかけ流しはしない。また、畦畔の補修等、農薬の流出防止に必要な対策を行う。
6. 農薬の空容器や空袋等の処理は、廃棄物処理業者に処理を委託する等により適切に行う。

予報根拠中の記号 (＋)：発生量を多くする要因 (－)：発生量を少なくする要因

I 普通作物

1 いね

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 苗立枯病 (リゾプス・フザリウム・ ピシウム・トリコデルマ)	平年並

1) 予報の根拠

向こう1か月の天候は、気温が高く、日照時間は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 苗立枯病は25℃以上の高温、10℃以下の低温になると発生しやすいので、日差しの強い時は遮光資材の活用や換気、低温時には保温に努めるなど、育苗期間中は適正な温度管理を行う。
- イ. 健全な苗を育てるため、床土の水分量には十分注意し、過不足のない水管理に努める。
- ウ. 灌水や薬液を灌注する場合は、白化現象を防ぐため水温を20℃前後とする。

(2) もみ枯細菌病・苗立枯細菌病

育苗期の発生を防止するため、下記の事項に注意する。

- ア. 育苗期間中（特に育苗前半）の過度な高温多湿は発病を助長するので、換気を行うなど適正な温度管理と、過湿にならないよう水管理を行う。
- イ. 特に、日差しの強い時は遮光資材を使用し、25℃以上の高温にならないよう適正な温度管理を行う。
- ウ. 発病が見られた育苗箱の苗は適切に処分する。

(3) 葉いもち

早期の葉いもち発生を防止するため、下記の事項に注意する。

- ア. 生粃殻・稲わら等は、苗の葉いもちの重要な伝染源になるので、絶対に育苗施設周辺に放置しない。
- イ. 育苗期に葉いもちが発生した場合は、本田での発生につながるのを見つ次第適切に処分する。
- ウ. 育苗箱施用薬剤により防除を行う場合は、使用量を厳守し育苗箱に均一に散布する。なお、育苗箱施用薬剤を使用したところでも7月以降の葉いもちの発生に注意する。
- エ. 水田内に取置き苗を放置すると葉いもちの伝染源となるため、田植え終了後直ちに処分する。

(4) イネミズゾウムシ

例年発生が見られるところでは、育苗箱施用薬剤により防除を行う。また、育苗箱施用薬剤を使用しないところでは、5月下旬に水田中央部までよく観察し、要防除密度（50株当たりの越冬後成虫の寄生数が稚苗移植では25頭以上、中苗移植では35頭以上）を目安に薬剤散布を行う。

(5) イネドロオイムシ

例年発生が見られるところでは、育苗箱施用薬剤により防除を行う。なお、前年に育苗箱施用薬剤を使用したところで発生が多かった場合は、薬剤の種類によっては防除効果が低下している恐れがあるので、薬剤の選定に留意する。

(6) 斑点米カメムシ類

前年秋季の発生量はやや多く、主要な加害種であるアカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメの越冬卵数はやや多いと推定される。

今後越冬世代幼虫のふ化時期を迎えることから、カメムシ類の生息地である畦畔、農道及び雑草地等での密度低減のため、畦畔等の草刈り（除草剤散布を含む）や休耕田の耕耘作業等により、日頃から雑草対策を徹底する。

また、アカスジカスミカメはイヌホタルイ等のカヤツリグサ科植物やノビエの穂に産卵し、これらの雑草が繁茂していると多発生することから、水田内の除草対策も徹底する。

育苗を行った後のハウスで野菜等を栽培する場合の注意点

いねの育苗箱施用薬剤は、育苗箱から地面にこぼれ落ちた場合や、薬剤処理後の灌水等によって農薬の成分が土壌に残留し、後作で栽培した野菜等に吸収され適用外成分として検出されることがある。

このため、いねの育苗終了後に野菜等を栽培する予定のハウス内には、育苗箱施用薬剤を処理した育苗箱を持ち込まない。また、育苗箱施用薬剤を処理する場合は、育苗箱をハウスから搬出した後に処理する。

2 むぎ

(1) 赤かび病

今年の出穂時期はややおそいと思込まれている。開花期（出穂期の7日後頃）とその7～10日後が重要な防除時期であるため、適期に薬剤散布を実施する。なお、出穂期前後から乳熟期にかけて、雨が多く気温が高いと発生が多くなるので注意する。

3 だいず

(1) 紫斑病

本病は種子伝染するため、健全種子を使用し、種子消毒を徹底する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) ネキリムシ類 (タマナガ・カブラヤガ)	平年並

1) 予報の根拠

- ア. タマナガの地区予察圃場（鶴岡市藤島）でのフェロモントラップにおける初誘殺は3月6半旬（平年：4月1半旬）とやや早く、4月5半旬までの誘殺数はやや少なかった。
- イ. カブラヤガの県予察圃場（山形市）でのフェロモントラップにおける初誘殺は4月4半旬（平年：4月3半旬）とややおそく、4月5半旬までの誘殺数は平年並であった。地区予察圃場では4月1半旬（平年：4月3半旬）で早く、誘殺数はやや多かった。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 成虫は広葉雑草などに産卵するので、播種前から圃場周辺の除草を徹底する。
- イ. 例年発生が見られるところでは、種子への薬剤処理又は播種時に薬剤防除を行う。

II 園芸作物

1 りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 黒星病	やや少ない

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量がやや少なく、本年の越冬伝染源密度はやや低いと推察される。
(一)
- イ. 4月後半の調査では、花そう葉における発生は確認されていない（平年初確認日：5月13日）。
- ウ. 向こう1か月の降水量は、平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 園内をこまめに観察し、発病葉は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。
- イ. 開花期前後は、特に重要な防除時期に当たるので、「落花直後」にDMI剤（EBI剤）混合剤又はDMI剤に保護殺菌剤（チウラム剤、マンゼブ剤）を加用し散布する。
- ウ. 「開花直前」の防除から「落花直後」の防除の散布間隔に注意するとともに、落花期以降も感染防止のため、散布間隔が10日以上あかないようにする。
- エ. 薬剤散布予定日に降雨が予想される場合は、計画を前倒しして降雨前に散布する。
- オ. 薬剤散布に当たっては、十分な薬液量（400ℓ以上/10a、落花期以降は500ℓ以上/10a）で散布ムラが生じないようにていねいに散布する。
- カ. DMI剤耐性菌が県内でも確認されているため、DMI剤単成分剤だけでは散布しない。また、DMI剤の総使用回数は2回以内とする。

(2) 斑点落葉病

黒星病との同時防除を兼ねて、5月中旬以降散布ムラが生じないようにていねいに薬剤を散布する。

(3) 褐斑病

前年の発生量は平年並であったが、一部では前年秋季の発病葉率が平年より高い園が見られた。5月は一次感染時期に当たるので、前年発生が見られた園では、散布ムラが生じないようにていねいに薬剤を散布する。

(4) 腐らん病

4月後半の調査では、一部で発生程度の高い圃場が確認された。枝折れ部分や摘果痕からの感染により発生が多くなる恐れがあるので、以下の対策を実施する。

- ア. 5月は病斑を確認しやすいので、園内を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- イ. 枝腐らんを発見したら、直ちにせん除し適切に処分する。
- ウ. 胴腐らんを発見したら、病患部は早期に健全部を含め紡すい状に大きく削り取り（削り取った病患部は集めて適切に処分）、塗布剤を処理する。なお、塗布剤の使用に当たっては使用回数を厳守する。
- エ. 発生が見られる園やその周辺の園では、摘果痕からの感染を防止するため、摘果後（6月上旬まで）に薬剤を散布する。その際、枝幹部にも薬液が十分にかかるよう散布する。

(5) キンモンホソガ

フェロモントラップによる初誘殺は、県予察圃場（寒河江市）が4月4半旬（平年初誘殺：4月5半旬）でやや早く、地区予察圃場（東根市）では、確認されていない（平年値なし。前年：4月1半旬）。

前年発生が多かった園では交配用みつばちの巣箱を撤去次第、薬剤散布を行う。その際は、さび果や生理落果などが発生しやすい時期なので、薬剤の選定に留意する。

2 もも

(1) 灰星病

開花状況をよく観察し、落花直後に遅れずに薬剤散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
(2) せん孔細菌病	やや早い	やや少ない

1) 予報の根拠

- ア. 春型枝病斑の初確認は、4月15日（6か年平均：4月27日）で早い。
- イ. 県予察圃場の「川中島白桃」の満開期は、4月22日（平年：4月25日）でやや早い。
- ウ. 4月後半の巡回調査では、春型枝病斑の発生量はやや少なかった。（一）
- エ. 向こう1か月の降水量は、平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 春型枝病斑は重要な伝染源となるので、園内をこまめに見回り早期発見に努める。なお、発病枝は見つけしだい基部からせん除し適切に処分する。
- イ. 風当たりの強い園では、防風ネットを設置する。
- ウ. 発生が見られる園では、落花後から7月上旬まで約10日間隔で薬剤散布を行う。なお、耐性菌出現防止のため、抗生物質剤は連用を避け、有機殺菌剤等と輪用散布する。

(3) モモハモグリガ

県予察圃場（寒河江市）におけるフェロモントラップでの初誘殺は4月3半旬（平年：4月4半旬）でやや早い。落花直後の薬剤散布に当たっては、訪花昆虫を保護するため、薬剤の選定に留意する。

3 西洋なし

(1) 胴枯病

5月は発病による枯死枝等の病斑部から胞子の飛散量が増加し、感染しやすくなるため、以下の対策を徹底する。

- ア. 萎凋枯死花そうや枯死枝は、徹底して取り除き適切に処分する。
- イ. 病患部を削り取り（削り取った病患部は集めて適切に処分）、切り口に塗布剤を処理する。なお、塗布剤の使用に当たっては使用回数を厳守する。
- ウ. 例年発生が多い園では、胞子が発芽する時期（5月中旬頃）の防除として降雨後数日以内の薬剤散布を徹底する。なお、5月中～下旬は重要な防除時期に当たるため、枝幹部にも薬液が十分付着するようていねいに薬剤散布を1～2回行う。

4 日本なし

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 黒星病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 前年の発生量は平年並であった。
- イ. りん片越冬量調査では、発病芽は確認されなかった（平年：0.3%）。
- ウ. 4月後半の巡回調査における花そう基部の発病は確認されていない。
- エ. 向こう1か月の降水量は、平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 摘花（果）時によく観察し、発病部位（花（果）そう基部、葉）は見つけ次第摘除し、適切に処分する。
- イ. 開花期前後は重要な防除時期に当たるので、開花状況をよく観察し、落花直後及び落花10日後の薬剤防除を遅れずに実施する。なお、前年発生が多かった園では、DMI剤（EBI剤）を落花10日後に散布する。

(2) 胴枯病

前年発生が多かった園では、以下の対策を行う。

- ア. 病患部を削り取り（削り取った病患部は集めて適切に処分）、切り口に塗布剤を処理する。なお、塗布剤の使用にあたっては使用回数を厳守する。
- イ. 果実の心腐れ症の原因となるので、発生が見られる園では、落花直後から6月上旬までの薬剤防除を徹底する。

5 おうとう

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 灰星病	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 前年の熟果腐れの発生量は平年並であった。
- イ. 向こう1か月の降水量は、平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 生育状況に合わせて満開3日後の薬剤散布を行う。
- イ. 前年のもぎ残しによる樹上のミイラ果、果梗からの発生が懸念されるので、もぎ残しが多かった園では防除を徹底する。
- ウ. 花腐れや幼果腐れは、熟果への伝染源となるので見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

6 果樹共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) ナミハダニ	りんご・もも ・なし・おうとう	やや少ない

1) 予報の根拠

- ア. 4月後半の巡回調査におけるナミハダニの下草寄生率は、りんごで0.9%（平年：4.1%）、おうとうでは0.6%（平年：3.9%）といずれもやや低かった。（一）
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並と予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 5月は樹冠内部の徒長枝葉でナミハダニが増殖しやすい傾向が見られる。葉裏をよく観察し、ハダニ類の成幼虫数が1葉当たり3頭以上見られたら殺ダニ剤を散布する。
- イ. ナミハダニの下草における増殖を抑制するため、樹幹周囲は清耕管理を行う。なお、除草後に下草から移動したナミハダニにより樹上密度が高まることがあるので、除草後に殺ダニ剤を散布する場合は下草が枯れるまで待つて行う。

(2) ナシヒメシンクイ（りんご・もも・なし）

フェロモントラップによる初誘殺時期は、県予察圃場（寒河江市）が4月3半旬（平年：4月4半旬）でやや早く、地区予察圃場（東根市）では4月4半旬と平年並であった。前年被害の多かった園や例年発生が見られる園では、以下の対策を行う。

- ア. 5月中下旬頃から新梢先端の心折れ被害が見られ始める。これらの被害新梢内には幼虫が生息しており、周りの新梢も加害することが多いので、見つけ次第摘除し適切に処分する。
- イ. なし園やもも園で交信かく乱剤を利用する場合は、4月末までに設置を行う。

(3) 果樹カメムシ類(クサガカメムシ・チャバ初カメムシ)（りんご・もも・なし・おうとう）

クサガカメムシの簡易トラップ（農業総合研究センター（山形市））での越冬量は少なかった。

落花期以降、園内に越冬成虫の飛来が見られることがあるので、見回りを励行するとともに、特におうとうでは成虫の飛来や被害果を確認したら防除を行う。

(4) ハマキムシ類（りんご・なし・おうとう）

4月後半の巡回調査の結果、平年並の発生量である。前年被害の見られた園では、果樹の生育に合わせて適期に防除を実施する。なお、訪花昆虫を保護するため、薬剤の選定に留意する。

(5) ウメシロカイガラムシ（もも・おうとう）

休眠期に防除ができなかった園では、防除適期を逃さないように樹幹上部までよく観察し、橙黄色の歩行性幼虫が出始めるふ化始めの時期（県予察圃場（寒河江市）平年：5月23日）に薬液が枝幹部にしっかりとかかるようていねいに薬剤散布を行う。

7 すいか

(1) つる枯病・炭そ病

生育初期の感染を防ぐため、以下の対策を実施する。

- ア. 降雨による土のはねかえりは感染を助長するため、マルチを隙間なく設置する。
- イ. 不要な側枝の摘除や適正施肥等の適切な栽培管理により、過繁茂を防ぐとともに通風を良くする。
- ウ. 交配前からの防除を徹底し、薬液が葉裏までかかるようていねいに散布する。

[発生予察情報で使用される時期、量の表現の基準]

1. 時期

平年並	平年値（過去10か年の平均）を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
ややおそい	平年値より3～5日おそい
早い	平年値より6日以上早い
おそい	平年値より6日以上おそい

2. 量（発生量、発生面積及び被害量等）

過去10年間の値を、発生が多い順に下図のように並べ、本年の値との比較により求めます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
←多い→	← やや多い →	← 平年並 →				← やや少ない →	←少ない→		

東北地方 1か月予報 (04/23~05/22)		
2022年04月21日14時30分 仙台管区气象台 発表		
特に注意を要する事項	期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。	
向こう1か月 04/23~05/22	天候	天気は数日の周期で変わるでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率50%です。
1週目 04/23~04/29	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目 04/30~05/06	気温	2週目は、平年並の確率50%です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)			
気温	東北地方	向こう1か月 04/23~05/22	
		1週目 04/23~04/29	
		2週目 04/30~05/06	
		3~4週目 05/07~05/20	
降水量	東北地方	向こう1か月 04/23~05/22	
日照時間	東北地方	向こう1か月 04/23~05/22	

低い(少ない)
 平年並
 高い(多い)